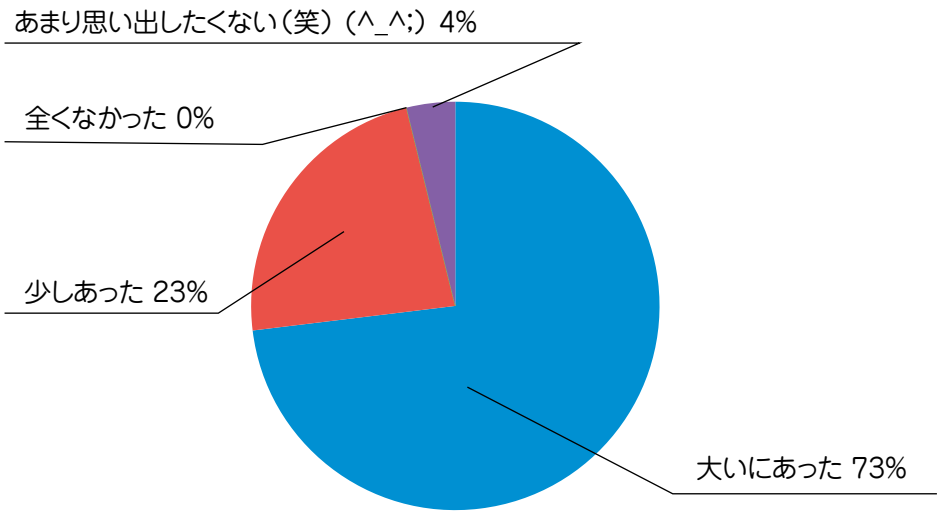
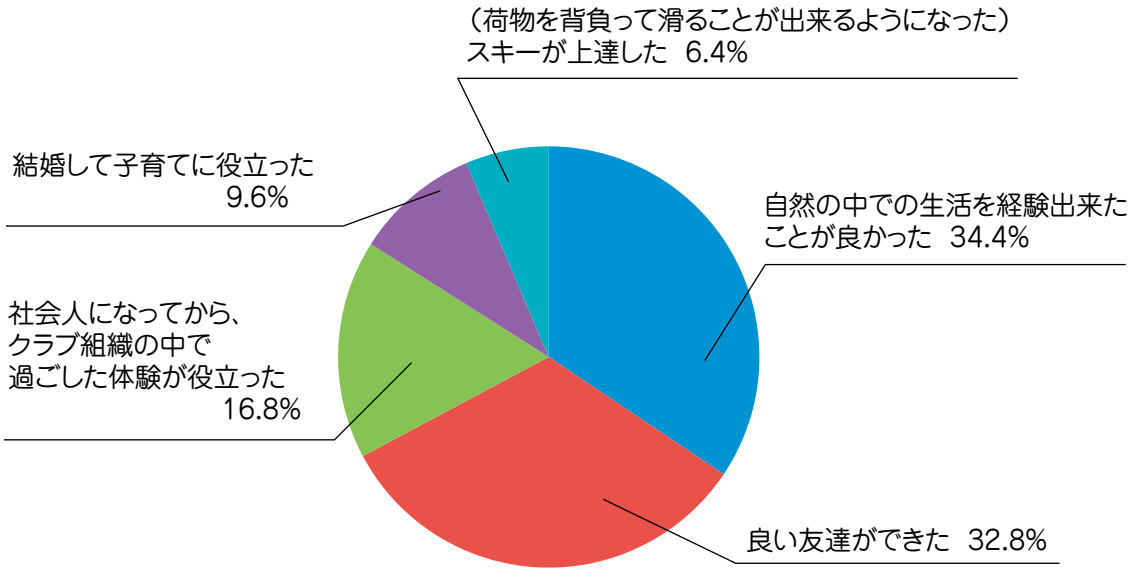
■一番好きな山、山域は?

	北アルプス	18	特に北ア北部、槍ガ岳
	穂高	7	常念岳、白馬八方
	上高地、小梨平	2	
	雲の平	1	
	大雪、トムラウシ	7	
	南アルプス	6	仙丈ケ岳
	立山連峰	6	11月、大糸線から眺める後立山
			剣岳
No.4	比良山系	3	
	八ヶ岳	3	
No.5	京都北山	2	
No.6	妙高・火打岳	1	秋の…
	白山	1	毎日家から見ています
	飯豊朝日連峰	1	
	戸隠・黒姫	1	
	二上山	1	ササユリの季節
	尾瀬	1	
	屋久島	1	
	八甲田山	1	

■ワンゲルの4年間は卒業後の人生に影響がありましたか?



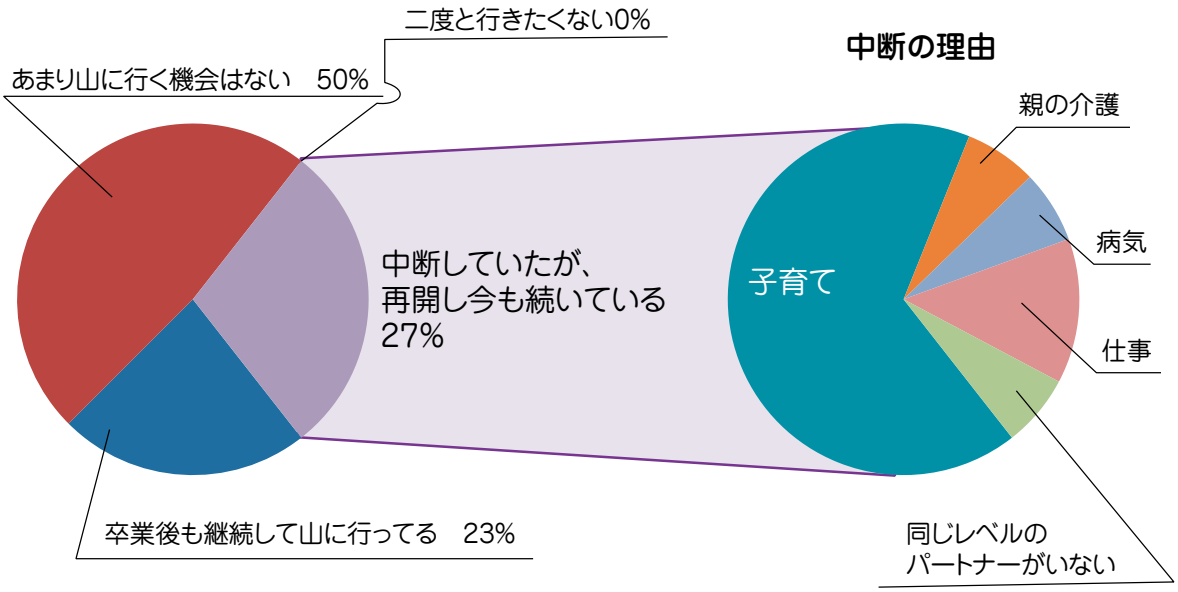
■どんな影響?



その他

- 山登りを通じてどんなに辛い事でも終わりがあるのだと教えられた
- 仕事等で辛いことがあった時も、冬山合宿での辛く大変な出来事に比べれば大したことないと思えるようになった
- （おかげで、安産だった!）
- 一生の伴侶に出合うことができました

■現在も山に行ってますか?

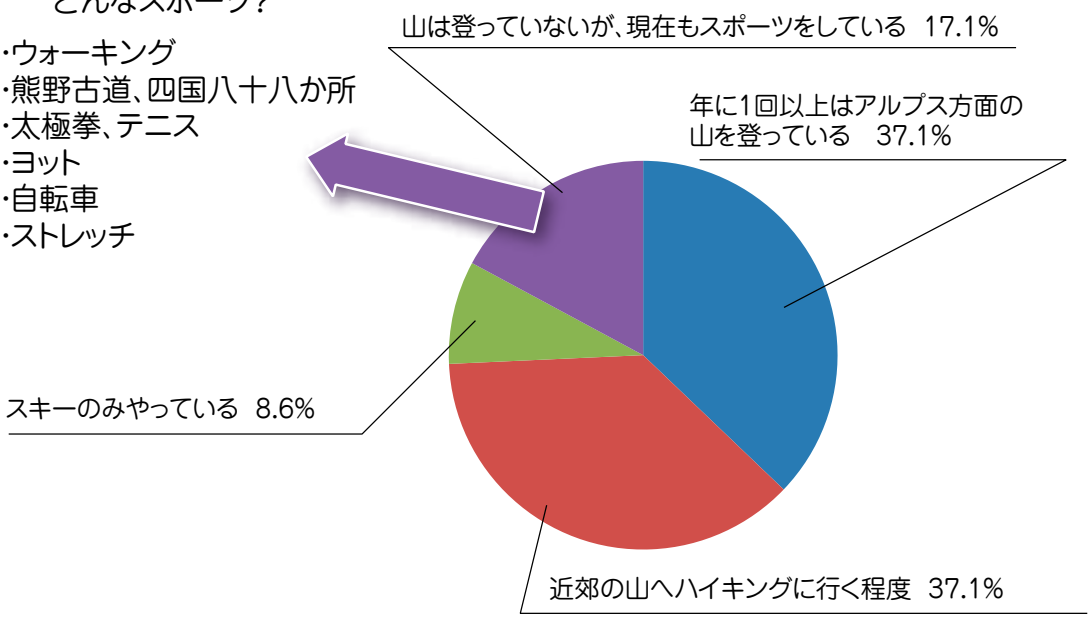


■現在も山に行っている人へ

1年に1回以上はアルプス方面の山を登っている	13人
近郊の山へハイキングに行く程度	13人
スキーのみやっている	3人
山は登っていないが、現在もスポーツをしている	6人

どんなスポーツ?

- ウォーキング
- 熊野古道、四国八十八か所
- 太極拳、テニス
- ヨット
- 自転車
- ストレッチ



「あし」に見る女子のあしあと

DWV部誌「あし」8号から56号の中から、女子リーダーの年間方針、当時のクラブの状況、女子部員としてのあり方、また個人としての悩みや迷い等が読み取れる記述をいくつか抜粋してみました。

それぞれの年代のワンゲル女子部員たちが、いかに生き生きとはばたき、また困難を乗り越えて来たか、現役当時の事を思い出しながら、読んで頂ければ幸いです。

なお、編集の都合上、一部省略、変更させていただいておりますことをご了承ください。

8号（1965年）

64名の部員の中で、女子と名のつくもの14名、約25パーセントを占めている現在、過去1年半余りの、甘い生活は終わって、当然きびしい態度で部生活を送るべく要請されるようになった。今までのように「どこまでついてくるか、見ていてやろう」的な実験段階は終わりをつげ、その結果を基礎にして、足場をまず第一に組み直す時期が来たことになる。

初代女子リーダー　＜136＞

9号（1966年）

二年半前の一口で言うならば指針のない、甘やかされた活動に比べて、現在の女子部員はDWVに溶け込み、その活動も地についてきていると言える。

10年もの伝統を持つ男子に比べ、まだ伝統と名のつくほどの活動の下地を持たぬ女子部員の方向は、まだまだあいまいな所が多いかもしれないが・・・＜158＞

女子とクラブ

女子がクラブをやっていく上に（家庭の問題）と云う事は大きな障害になる。「女だから○○せねばならない」「女だから○○してはいけない」と云うような「女性」と云う社会的観念によって一定の枠の中に閉じ込められる。この「枠内」という条件のもとで努力し、より良き女子に育って行きたい。

＜192＞

あんな重たいもの持って・・・」「こじきみたいなカッコして・・・」「お金ようけいるんでしょ・・・」「そんな重たいもの持って山に登ってるから足が太なるんよ…」「かわってるねぇ・・・」そう、自分自身変わっていると思うこのごろ、そして女子部員みんなどことなく、少しばかり変わっているのでは?と思うこのごろ。だからこそ我ら（いえ私）はエッヘン!ワンゲル部員。＜189＞

この年、初めて女子部員が4学年揃った。

名実ともに「女子パーティー」の誕生。
「どこまで付いてくるかみてやろう」的な実験段階はいつの間にか思い出話になった。
「自ら考え、企画し、行動する」を目標に・・・
1966年秋合宿　＜155＞

10号（1967年）10周年記念号

南アルプス！（中略）アルプスなんて行ったことない、知らない山、女だけでそして大キスで出かけるなんて、と不安を覚える。出来るなら確かな人に連れて行ってほしいという、女らしい（？）依頼心がふと心をよぎる。ダメダメ、そんな事じゃいつまでたっても自分の山行なんてできっこないぞ！

1967年夏ＰＷ　＜159＞

11号（1967年）

女子がクラブにおいて、目新しい存在だった時を考えると、今はその存在が当然の存在になってきている。ただ女子が存在するか否かが問題であった時から今度はいかに、どのようにしてと、次の段階の事を考えていかなければならない。　＜192＞

12号（1968年）

女子は男子の、男子は女子の活動の発展を妨げることがあってはいけない。でも自己主張する余り、ＤＷＶの一員であることを忘れてはいけない。お互いに協力し合い、歩み寄り、ＤＷＶの枠の中に自立し合った二つの塔を築きあげた時、本当の意味での男女一緒のクラブ活動の意義が見いだせるはず　＜219＞

13号（1969年）

「女子の一人立ち」を目指して歩いてきた女子部員も今や総勢12名。「一人立ち」そして「一人歩き」の目標も諸先輩諸氏、諸嬢の努力によって達成され、「いかに歩くか」を考え始めて日も浅くない。部内の男女共存の悩みも表面上には今は昔の物語となった。女子部員の伝統も確立されつつある今こそ、純粋に活動に没頭出来る時である。　＜234＞

情熱
こそがクラブ活動
を支えていく原動力！
＜250＞

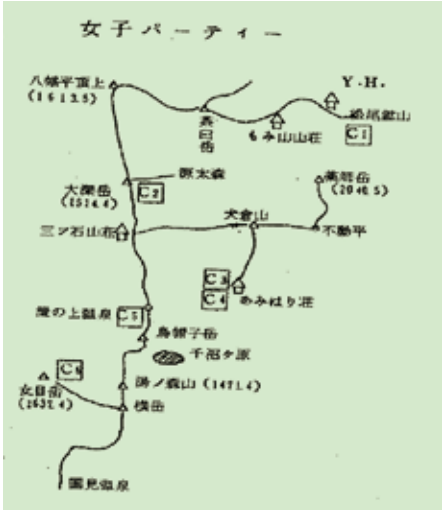
1969年５月　女子二年強化合宿　北八ヶ岳

14 号 (1970 年)

今日に至っては女子の存在もごく自然な事として、十数年の伝統を持つ男子と普通に肩を並べて活動している。ガレ場に咲く一輪のコマクサの様にワンゲルの中にひとときの憩いをもたらすことが出来たら　　＜ 250 ＞

秋合宿、自分たちの選んだところをというので、私たちのパーティーは敦賀半島を選んだ。また女子が初めて 2 パーティーと云う形をとり、人数の構成から言っても、今まで以上に個人が各々持てる力を充分発揮できる訳であった。

＜ 236 ＞



合宿要綱の概念図

15 号 (1971 年)

私達は春合宿を除き、女子パーティーが女子だけで活動することが当り前の事として育ってきました。けれど、その当り前のことを行う中で、種々雑多な犠牲ともいえる問題に注意を向ける時、もう一度女子なりの活動の方向性を検討してみる必要を感じます。　＜ 268 ＞

この年、春合宿で女子、冬テン生活の第一歩！

女子が
何とか女子なりの活動の方向
性を見出そうとする限り、3，4 年
になっても一学年最低 3 名は確
保したい　＜ 268 ＞

16 号 (1972 年)

女子、年間完全独立活動が出来るようになった。

独立を焦るあまり、女子の独自性を見失ってはならない。女子パーティーとして男子から独立することよりも一人前のワンダラーとして独立できるよう考えることの方が先決である。そして一人前のワンダラーとなるのに必要なのは、基礎体力・技術はもちろんであるが、何よりも自然のすばらしさ、山行の楽しさを知ってそれに触れたいと感じる事ではないだろうか。そして、それがワンゲルの原動力になるのではないだろうか。　　＜ 291 ＞

17 号 (1973 年)

女子部員が１３人に。しかも２年生が５人も健在であり、女子だけでパーティーを構成出来ると云う理想的な年となった。が、反面つい独自の方向を見失い、背伸びした活動をしがちでもある。私達（女子部員）が実力以上の事をして、身体を痛めたりすることのない、実力に応じた自分で責任の持てる範囲で精一杯の活動をすべきである。　＜ 309 ＞

18 号 (1974 年)

ここ数年、女子の活動は安定してきている。これは先輩方のお蔭であり、女子の人数がある程度一定してきたせいである。この充実した時期に何のこだわりもなく、真の意味での男女協調の下で、可能な限りやりたいことをやっていきたいと思う。＜ 322 ＞

人に言わせれば、“ワンゲルなんてとんでもない”そうです。そのとんでもないワンゲルの雰囲気が、私にはとても良く合うのです。＜ 352 ＞

19 号 (1975 年)

数の減少を危機と呼ぶなら、数年前の危機が再び我が女子部員の上に影を落としつつある。
数の減少は体力的にも精神的にも個人の負担を重くする。先輩方の残した足跡を同じように歩くことさえ、５人と云う少数では困難に思われる。我々の世代が次の世代への橋渡しの役目に費やされても、それは責められるべきではないし、また無駄でもない。

今は自分が率直に考え、やりたいと思ったことだけで、そのまま存在し充足しうるような場所でありたいと考える。　＜ 344 ＞

20 号 (1976 年)

創立２０周年記念特集号　「OB からのメッセージ」より

卒業して半年、毎日、家と会社との往復と云う単調な味気ない生活を送っています。そんな中で、習性からかそれともやっぱり好き故なのか、山への想いが時折こみあげてくるのが一つの救いになっています。９月の末に久しぶりにワンゲルの OG3 人で北アを歩いてきましたが、トレなし山行でピッチは上がらず、ダウンは長し。そして相も変らぬ雨女に雪女。だけど温泉につかって山を仰ぎ、空気を思いっきり吸い込んで、汽車に乗り一杯やりながら満足して帰ってきました。そして今、地図を横目にビルの谷間で頑張っています。
＜ 322 ＞

クラブにいたころは、いつも山へ行くと、雨など降り、雨女と云われたものですが、今でもやはりどこかへ行くと、雨が降るのです。それもどしゃ降りだったりして。それで、今は静かにつるべ落としの秋の夕日を眺めたりしています。でも学生時代と云うのは、雨などの中を真剣に歩くのもいいですよ、と後輩の皆さんに自己弁護も兼ねて言っておきましょう。
＜ 323 ＞

雨にぬれても風に吹かれても、ワンゲルは歩かなくっちゃならないのです。なんでこんなみじめな姿で重いザックを担いで山に登るんでしょう？街ではみんな、きれいな洋服着て、優雅にお茶でも飲んでいるのに。　＜ 384 ＞

ワンゲルの特典

①身体が丈夫になります。②友達がたくさんできます。③おおらかな人間になります。
④プロポーションが理想的ワンゲル娘になります。しなやかな曲線美が大キスを背負い歩くことで、肩はアメラグ選手のようになり、足が太く太くたくましくなり、強い母になれることうけあいです。
＜ 384 ＞

男性に言いたい放題！

何の因果か、男性中心のこんなクラブに、何の因果か女の身で入って来て。
強いのダ、勝っているのダ、と思っている男性ならばちょっと背を曲げて見てもらいたい。
一生懸命背伸びしている女の子がみえるはずなのに・・・男なんていい気なもんだ、男でありゃいいと思っている。トレシャツ臭くて当然と思っている。女は男のように強くて女らしくあることを要求されるのです！　＜ 369 ＞

22 号 (1978 年)

何か新しいことをしようとする時、やみくもに手を広げ過ぎては結局何も出来ずに終わりがちです。女子は女子、と力み過ぎるのではないか。足元を見直して、ワンゲルの原点に戻って自然を身体で感じることが大切だと思う。　男子の理解の好意に甘えるのではなく、行動でそれに答えて行くつもりです。
ついつい男子と同質化し勝ちな女子部員ではあるけれど、優しさと繊細な心を忘れず、かつ軟弱にならず、一人のワンダラーとして人格の完成を目指していきたいと思うのです。
春合宿（根子岳・四阿山）　＜ 384 ＞

23 号 (1979 年)

昨年は秋から一次・二次スキー、春と男子と行動を共にし、女子だけでは行けない山域に行けたことは、私たちにとって大きな力となり、自信となった。が、一方、どうしても男子に頼ってしまう合宿となった。それで、今年は男子と別れて行う事にし、女子のみの力を試してみたいと思う。　＜ 405 ＞

クラブは
自分の一部であるべき、ボックスか
ら外へ飛びだしてみたりもした。でもそのくせ、
「山へ登るのですか」「山はいいですね」などと言わ
れようものなら、一遍にその人を尊敬したくなり、十
年来の理解者を得た気分になって、「ええ、私も山
に登るんです」つい口走ってしまうのです。
＜383＞

24 号 (1980 年)

現在女子部員は二回生４名、一回生３名で、最上級生が２回生と云う事で男子の力を借らざるを得ないのが現状であるが、甘えることなく、女子だけでもできる事をやっていくべきかと思う。女子部員全体のまた個人の弱点の補強や、技術、知識の習得で、地味ではあるが着実な力を付けていく事を活動方針とする。　＜433＞

25 号 (1981 年)

創立 25 周年記念特集号

女子は今が新しい第一歩とも言えるのだから、全員が互いに助け合っていってほしい。
（前主将の「前任を終えて」より）　＜414＞

26 号 (1982 年)

１年前、私達の活動は、やっと女子が４学年そろったという喜びの中、女子独自の活動を立て直そう、というところから始まりました。現在の女子部員は、体力や持久力について特に問題とすべき点はないと思います。やはり取り上げるべき問題は精神力、大自然の威力を目前にするときでも、落ち着いて対処出来る精神力を養っていくことが、今の女子にとって課された大きな問題です。
＜432＞

卒業生の「私記」より
ラッシュ・アワーの中、人込みを避けようとしてヨタヨタになりながらも時間に遅れないよう急いでいる時、「ワッ!! 女の子やん!?　ようやるなあ、俺やったら娘には絶対山登らせへんな！」なんてひどいお言葉を大キスの向こうに聞いて、振り返る勇気もなく、ますます小さくなったこともありました。
＜432＞

現在、女子部員は３回生１名、２回生２名、１回生１名、計４名と、数年前より激減した状況である。
クラブという組織の中での女子、ワンダラーとしての女子、そして少人数という両面性をもつ条件等をもっと考えていかなければならないと思う。今もって男子部に付随した女子部という観がなきにしもあらずだが、男子観を抜きにした一個人としての活動を各部員に期待したい。冬期はゲレンデスキー技術の獲得を、まず第一の女子の目標として冬合宿に取り組み、今後の女子部としての冬期活動の足がかりを固めたい。
＜ 446 ＞

女子は少数だっただけに、個人の意見をまとめていく難しさを味わった。女性本来の繊細な神経・甘えといったものは、本能的・必然的でどうしようもないと思ったのも本当である。今後、精神面の充実という点を真剣に考えてほしい。　＜ 434 ＞

27 号 (1984 年)

合宿前は、SL としての任務が遂行できるのだろうか、本当にこのメンバーで無事に合宿が貫徹できるのだろうか、という不安でいっぱいではあったが、何はともあれ、全員無事で、さほど問題もなく合宿を終えられたことを、その上、連日好天に恵まれ快適な山歩きが楽しめたことを、メンバー全員で心から喜びたい。
メンバーが５人しかいない上に、バテた１回生の分、軽い軽いとカバーしてくれた PL さん。この合宿成功への一番の担い手です。女子 PARTY 全員でお礼が言いたい。“ありがとう”
　そして女子 PARTY のみんな御苦労様。　＜ 471 ＞　SL による夏合宿報告（南アルプス）

１回生のときは三人もいた女子だけど最後の一人になっても続けてくれた内山にお礼を言いたいと思います。
＜ 445 ＞（前主将の「任を終えて」より）

卒業生の「私記」より
虫の息の如く絶え絶えの女子部ですが、今後も生きながらえることを心から祈っています。＜ 471 ＞

体力の限界は、男よりもずっと手前にあるよ。でも、私はまだそこまで行ってない。限界が見えてくるぐらいにまで、まだ精進できてない。男の人の限界よりもずっと手前にあるはずの、女の人の限界に対してでさえ、まだまだ私自身はがんばれてない。
　２回生＜ 479 ＞

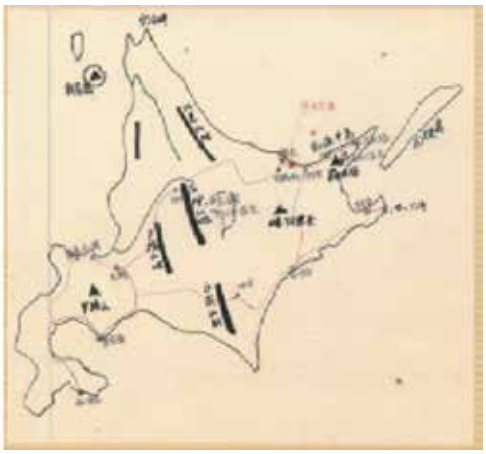
合宿から帰る度に友達に無事だった？と聞かれ、男の世界にいるなどと言われながらもこの先、ワンダーフォーゲルを続けていくだろうと思う。
１回生　＜ 495 ＞

28号（1985年）

女子は毎年、夏合宿が終わると１回生の誰かがやめるのではないか、という心配がつきもののようだが、今年は、そういう心配も特になく、その上、秋の P.W. では初めてのカッパを使わない山行が経験できたそうで、それを楽しそうに報告してくれるのが、大変嬉しい。まだ、女子独自の活動の指針としては、試行錯誤の状態だが、みんなで一丸となって、それぞれが、とにかく目一杯山を楽しむことができるよう、がんばって行きたいと思う。

夏合宿 SL 報告　＜ 479 ＞

「夏合宿のあとみんなと別れてから、しばらく一人でぶらぶらして、知り合った人と一緒にヒッチ・ハイクして、ついでに、乗せてくれたおじさんの牧場に泊めてもらって…」でも、私の親は何も言いません。せいぜい「気ィつけなさい」ぐらい。これは放任ではなく、親の方で私を把握して信頼している結果だと思います。私はたぶん、親の意にそぐわないようなことはしないだろうし、親はそれを信じていてくれるからだと思います。　＜ 479 ＞



きっちり整理されたアルバムより

29 号 (1986 年)

今年は待望の１回生を３人迎え、女子７名で夏合宿を南アルプス北部において行った。台風の影響で、当初８泊の予定が 10 泊という長い合宿となったものの、全員元気に完走できたことはうれしい限りであった。

10 泊目、最後の夜を三伏峠で迎え、あれこれ合宿のことを振り返り、合宿中のエピソードに花が咲いた。それにしても、女子パーティーは食べ物の話題が妙に多かったなあ。いつでもどこでもすぐに食べ物の話になってしまう。シュラフに入りながらも、食べ物しり取りなんかをやっている。　夏合宿 SL 報告（南アルプス）　＜ 495 ＞

30 号 (1987 年)

ここ数年女子部員が少なく例年冬、男子と共に（オブザーバー付きで）同行程で組まれていたが、今年は女子も増え独自の活動をと春は（女子 only では冬山合宿は無理なので）急きょ、西表島へと決まった。　春合宿 SL 報告（西表島）　＜ 496 ＞

梅雨が長引き、8 月になっても雨。雨にたたられた夏合宿となる。合宿初日に暴風雨に見舞われた。テントのポールが折れ、小屋に避難するものの、残り行程を完走。

今年の１年生も頼もしい限りである。二次新練・夏合宿と女子としては忙しい計画だったと思うが、頑張ってくれている。年々、女子は強くなっていくようだ。

夏合宿（剣、雲ノ平～槍）　＜ 496 ＞

31号（1988年）

実を言いますと、現役のころ、女子独自の活動体制を整えたいという焦りの中で、義務的に合宿をこなしていく自分を感じては、気まずく思ったことが、しょっちゅうありました。
山に対する罪悪感とでも言うのかなぁ。　山のことは大好きです。　実際、夏合宿終了後のP.W.期間には何の迷いもなく山へ・・・だから、私はボートを漕いだことがない・・・
別に嫌っていたのではありませんが、その興味は行ったことのある人の話を聞いている間に留まってしまっただけです。これは監督の「自然にオールマイティであれ」と仰言るのに反することにもなるのでしょうが、私の中では、ごく自然な流れでした。（中略）でも、私は、山が好きだということと、クラブの運営を最後まで結びつけられなかったようで・・・クラブにも罪悪感を感じる私がこんなこというのもなんですが・・・今、現役は「ワンゲルらしさ」をどう思っているのでしょうか。　＜ 496 ＞

32号（1989年）

私たち女子パーティーは、南アルプスの南部茶臼岳から北部の北岳へと 9 泊 10 日の合宿であった。5 人という必要最小限の人数で長期合宿を行うのは初めてで、最後まで行けるかが心配であった。そこで、少しでも余裕を持たそうということでデポ隊を出すことにした。これもまた初めての経験であった。　夏合宿南アルプス　　＜ 536 ＞

33号（1990年）

2 回生が合宿前に体調を崩したため、当初女子パーティーだけで行く予定にしていた北アルプス縦走計画から男子の縦走パーティーに組み入れてもらった。男子は石狩の方から入る予定だったが、女子にはこの前半はきついと判断し、黒岳で男子パーティーと合流することにした。かなり慌ただしく準備を進めたが、男子パーティーの快い協力で楽しく成功を収められた。感謝している。夏合宿（北海道・大雪）　　＜ 538 ＞

34号（1991年）

今年の夏合宿縦走は、女子の部員数減少のため、男女合同パーティーで行いました。体力差があるため、男子にはゆっくりとしたペースで歩いてもらうことになってしまったけれど、男子メンバーの協力により、今年も女子の夏合宿を長期間行うことができました。
夏合宿（北アルプス）　＜ 553 ＞

35号（1992年）

全体の部員数激減。男子は 1 パーティーのみ。女子部員数は減少のため、OB に入ってもらい、春合宿、夏合宿ともに男女合同で実施。春合宿（尾瀬）、夏合宿（南アルプス）

36号（1993年）

合宿形態は分散型で、女子パーティーとしての合宿はなかった。

今年の夏合宿は例年の夏合宿の形態とはかなり違ったものとなった。
縦走、沢、ボート、自転車という同大ワンゲルのもてるアイテムを駆使して北海道を南北に縦断し、集結するという欲張りな企画が実現化した。この計画の一番のネックは最上回生の人数の少なさであった。しかし、4回生の堂本さんが参加してくださることでうそのように問題は解決した。発端は大西コーチのアドバイス。夜間登山のことでもそうだがコーチの発想の柔軟さに驚かされた。

大切なのは遊び心、柔軟な発想。そしてそれを実現化する余裕。余裕は人数と力（体力、技術、経験）、情熱から生まれる。（中略）上回生になれば体育会特有の様々な雑事がある。少ない人数では日々の雑事に追われ無事に合宿を終わらせることに精いっぱいで「遊び心」をのぞかせる余裕がなくなる。クラブが仕事に思えてくる。時間の大半をクラブに費やす。安全面を重視して「保守的」にならざるをえない。だから人数は大事なのです。みんなで勧誘がんばろう。　＜570＞

37号（1994年）

1回生の終わりに女子一人になった時、正直言ってやっていけるのかどうか自信がありませんでした。それでもつづけられたのは先輩方のお蔭だと思います。　＜589＞

乗鞍にて女子OBの集いが開催された（女子OBの半数が出席）

「卒業生からの便り」より

肺が押しつぶされそうなあの荷物、合宿前には持ち上がったのに、荷物は軽くなったはずなのに、疲労のために持ち上がらなかったあの悔しさ・フラフラバテバテで、一歩一歩自分を励ましながら登る。足が何度もつり、倒れる。「もうダメだ」と思う・でも歩ける。「限界」なんていいかげんなもの。雪のドーム。降って来そうな星。男子の中の女子一人で歩くあのプレッシャー。「一番最初にバテルとしたら私だ」と云う怖さ、緊張感。一時間ごとに目がさめる夜。嵐の中で用を足すあの不快さ。前の晩から楽しみだった朝のラーメン。すべてひっくるめて心地よかった。でもこのまま4年間「ワンゲル」にはまってしまいそうな自分が怖くて飛び出した。ワンゲルを離れた4カ月間、ひたすらクラブが恋しかった。新しい仲間と飲んでいても、騒いでいてもワンゲルを思い出す。私の体質はすっかりワンゲルにはまっていて、何をしてもものたりなくなってしまったのだ。「恥も外聞」もへちまもない。涙を流してクラブから送り出してくれた皆さんには悪かったけど、ただクラブに戻りたかった。一度クラブをやめた人間が戻ってくるなんて前代未聞。私が最後まで頑張れたのはクラブのみんなのおかげだと感謝している。
そして何より「楽しかった」ありがとう。　＜570＞

38号（1995年）

阪神淡路大震災があった年、遠い場所や無縁の場所での出来事に対して、無関心だった自分に反省させられました。ワンゲルを続けながらももっと広い視野で世の中を見て、いろいろな意味で社会勉強をしていかなければと思いました。　＜589＞

私　は
ザックナンバー601番になった。自分をほめてあげたい。たまには自分をほめることも必要だ。
うん！そう思う。＜601＞

39号（1996年）

根子岳・四阿山ともに快晴に恵まれた。しかし、行動面を振り返ると、この合宿の目標の、来年の雪山女子独立をめざして、先輩をあてにせず、自分のできることは積極的に取り組むということが各自できていなかったように思う。この合宿で見えた課題を皆が認識し、次につなげていきたい。　＜593＞

山は、絶対に女だと思う。
春は女の優しさ。夏は女の無邪気さ。
秋は女の哀しみ。冬は女の激しさ。
それは女の気まぐれ。
岩陰に咲く花は、恋する乙女心。

山の美しさは、女の美しさ。
そんな女に恋をしたワンゲル君。
そんな女にだまされたワンゲル君。
私はそんなワンゲル君とお友達。
＜601＞

（前略）５月、私はワンダーフォーゲル部に入部しました。１次半新錬では、小中高と運動系のクラブ活動をしてこなかった私が何故か、２人の１回生の男の子のばてた姿を後ろから眺めることになりました。
こりゃちょっと絶好調過ぎないか？と怖くもありました。しかし、その後２次新錬、夏合宿、その合間のトレーニングと、めきめき体力をつけていく男の子達を前にして、男と女の違いをみせつけられました。その上いやでもワンゲルは男女を区別します。その方がワンゲルにとって合理的だからです。私も女の私が割って入って生まれるリスクは理解できました。しかし何と女だから○○できないという思いが多かったことか。結構悔しかったのです。
２回生になりました。女の子が３人も増えました。女子パーティーが、先輩の力を借りてではあったけれども誕生したのです。そしてやっと男子、女子各々のレベルにあった合宿、という視点が見えてきました。女だから○○できないから、女同士で○○できると変化したのです。可能性が一挙に拡がった気がしました。　春合宿（根子岳・四阿山）　＜593＞